

学級通信【WONDER】から学ぶ学級通信作成のノウハウ

—学級通信発行を支える「ネタ」と「コツ」の15のポイント—
(若手教師へのメッセージ)

研修実務家 梶浦 真

I. 学級通信は子供と子供、子供と教師、教師と保護者を繋ぐ「情報の窓」

筆者は子供の頃、学級通信をもらった記憶はありません。熱心に学級通信を書いている先生がおられることを知ったのは、学校に関わる仕事をするようになってからです。学級通信をよく書かれている先生のクラスは、「荒れが少ない」「チーム力が高い」「変化に対して全体が柔軟に対応する」「子ども同士の間認め合いの風土がある」「基礎学力だけでなく、非認知的能力も高い」「保護者からの信頼が厚い」という傾向があります。非認知能力とは「粘り強さ」「チャレンジ精神」「忍耐力」「協調性」など、知能とは異なる能力のことを示します。「学級通信」を通して子供が繋がっている学級はしなやかで強い。これはこれまで3000校近くの学校に伺ってきた私の個人的な感触です。

なぜ、そういう傾向が生まれるのでしょうか。それは、子どもを中心とした「情報共有組織」として、子ども自身を含む人々のネットワークが繋がって行くからでしょう。子どもの姿や、子どもへの願いを学級に関わる多くの人々が「学級通信」を通して、子どもの今の状況を知ることができます。そこからは、子どもの姿だけでなく、教師の考え方や子ども達に対する眼差しも見えてきます。子供が成長していく姿、過程を共有する効果も持っています。保護者も学級通信を通して、学級の様子や学習活動の今を知ることができます。こうして、担任への信頼感も高まって行くのです。

II. 忙しい環境の中で学級通信を出す「コツ」

現在の日本の小中学校教師が置かれている労働環境は過酷です。忙しいという状態をとっくに通り過ぎて、「目まぐるしい」という感じさえ受けます。こうした、超多忙な中で、「学級通信」を出し続けることは容易ではありません。しかし、その多忙な中でも「学級通信」を出し続けている教師もいます。では、そうした先生はどうやって学級通信を出しているのでしょうか。ネタはいつ、どこで集めているのでしょうか。何か「学級通信」を発行し続ける「コツ」があるのでしょうか。私はあると思います。

まず、第1の「コツ」は学級通信を出し続けることです。「なんだ、そんな元も子もない話か」と思われるかもしれませんが、しかし、日記やブログの様に毎日出し続ける習慣、アウトプットの習慣を毎日の日課にしてしまうことが大事です。先ずは、量よりも決まった頻度で出す習慣をつけるということが大事です。そうして、情報をアウトプットすることで「アウトプットが得意な脳」に脳が変わって行くのです。情報をインプットする能力と、情報をアウトプットする能力の間には「落差」があります。文書を読んで（インプットして）「いい文章だな」と受動的な判断をすることはできても、「いい文章を書く」というアウトプットは難しいことが多いのです。人の脳はインプットよりもアウトプットの方が負荷が大きいという性質を持っています。例えば、歌を聞いて（インプット）その歌が上手いか下手かは誰でもある程度は判断できます。しかし、歌を聞いてその良し悪しが分かったからと言って、自分も上手く歌が歌える（アウトプット）とは限りません。そして、アウトプットの能力はアウトプットをすることによって伸びて行くのです。ですから、学級通信を出す頻度を決めて、アウトプット習慣をつけることが大事なのです。

学級通信を出す「コツ」その2は、伝えたい何かを持つという事です。学級通信の発行において根源的な要素は、「伝えたい」という思いを持つことです。伝えたいことがあれば、自然と伝える言葉は出て来ます。伝えたい情報が無いのに、文章を書くテクニックやノウハウを知っていても役に立ちません。この点は、どの先生においても全く心配はありません。子どもに言いたい事、伝えたいことは沢山ある筈です。その伝えたいことが伝わる関係づくりにも、学級通信は力を発揮します。この「伝えたい」という意欲は「育てたい」という意欲と表裏をなすものです。「育てたい」という意欲が、教師の目を子供に向けてゆくエネルギーになると言えるでしょう。

学級通信という多くの人が共有する情報の中に、「子どもを見つける言葉」「認める言葉」「見守る言葉」があれば、子どもも保護者も教師という人間を認める様になって行きます。子どもに対して「**見つける眼**」「**認める眼**」「**見守る眼**」という三つの眼を持って、子どもを見て行けば、子どもの姿から必ず「ネタ」が見つかります。では、子どもの姿意外にどんな「ネタ」があるでしょうか。

Ⅲ. WONDER◎から学ぶ学級通信の「ネタ」と種類

「人間は生まれながらにして、知ることを欲している……。そして【驚き】によって人は考える、哲学することを始めたのである。」アリストテレスの「形而上学」という著作の書き出しは、【驚き】ということが、考えるという行為の源にあると説きます。本書は、学級通信【WONDER】を一冊の記録としてまとめたものです。しかし、この書籍を発行する時、単純な文集の様な編集ではもったいないと感じました。正に【WONDER】を拝見して、「！」という驚きがあったからこそ、こうして解説的な文章を書いて内容を補足、価値づけしてみることにしました。

【WONDER】はそのまま、学級通信のネタをして使える話題もあります。しかし、もう少し深く捉えてみると、学級通信のネタを掴む「コツ」も見えてきます。実際の【WONDER】を元に、学級通信のネタやコツを分析してみましょう。

〈ネタ①授業の様子を伝える〉

何をどの様に学んでいるのか、学級通信で紹介します。子供の学び情報を、保護者を含む学級全体で共有します。時には写真などを使うこともよいでしょう。教室のライブ感ある学びを紹介します。業の様子をネタにすることは、最も基本的な定番の「ネタ」だと言えます。

〈ネタ②学校行事を取り上げる〉

学校行事の取り上げ方は様々です。林間学校や運動会、或いは読書週間への取り組みなども「ネタ」にできます。行事を行う前には、行事の意義や注意事項を確認する内容を「ネタ」にできます。行事の直後には行事で学んだことや体験したことを「ネタ」にできます。①とも関連しますが、行事に取り組む子どもの姿を活写することもいいですね。行事の後は事後の反省や、振り返って活動のよさを再び味わわせることも考えられます。

〈ネタ③学級目標について考える〉

学級目標を創る前には、事前にいろいろな情報を提示します。学級目標を掲げたならば、その目標がきちんと機能しているかどうかを子ども達に問いかけます。学級目標を意識させて、問い直しをするネタです。

〈ネタ④教師の願いを伝える〉

教師には色々な願いがあります。謙虚に生きて欲しい、明るく生きて欲しい、ねばり強く生きて欲しい、楽しみながら学んで欲しい等々。あまりお説教臭くなると、子どもからは嫌われてしまいます。お説教臭くしないためには、先生自身の経験を入れるとよいでしょう。

〈ネタ⑤授業の振り返りを打つ〉

授業で確認して起きたいことや、理解を確実にしたいこと、あるいは授業の中で出てきた疑問を再度振り返ります。単純なおさらい学習（復習）でも良いのですが、クイズ形式にしてみる、わからなかった疑問を振り返るといこともネタになります。特に疑問を振り返るといことは、問いを持つ子どもを育てる上で重要ですね。

〈ネタ⑥子どものよさを認め、共有する〉

子どもの授業や学級での表れのよさをネタにします。基本的にポジティブで褒めること、長所しか書きません。また、特定の優秀な子どもに偏った認めは、不公平感を生みますので注意しましょう。

〈ネタ⑦授業の感想や評価をする〉

子どもに授業評価をしてもらい、その内容をネタにします。教師としては、子どもに授業評価をさせることを嫌う方もいます。しかし、若手の時期にこそ、子どもという授業ユーザーの声をよく聞いておくことが大事です。「黒板の字が読みにくい」など、公開したくない意見が出る可能性もあります。それでも、あえてネタとして公表して「先生ももっと見やすい板書をする様頑張ります！」と書けば、逆に子どもや保護者の好感度もアップします。

〈ネタ⑧著名な人の逸話を紹介する〉

政治家やスポーツ選手や偉人、あるいは今マスコミで話題になっている人の逸話を紹介してネタにします。こういう一流人のエピソードや言葉には、なぜか強い説得力がありますね。

〈ネタ⑨学び方について考えさせる〉

よい質問の仕方や、発表の仕方、考え方のコツなどをネタにします。学習内容そのものに関するネタというよりも、学習方法や思考スキルに関するネタです。【WONDER】の中にも「太った質問／痩せた質問」「思考スキル（トニー・ブザンのマインドマップ）」等がネタになっています。探してみてください。

〈ネタ⑩社会の動向を伝える〉

社会の動向を伝える内容もネタになります。環境の問題や、政治の問題、科学における発見やノーベル賞の話題など、「現実の問題」をネタにします。新聞やテレビなど、あらゆるマスコミが情報源になりますね。教材は教科書だけの中にだけあるわけではありません。

〈ネタ⑪クラスとしての挑戦次項を確認する〉

クラスのイベントや学習目標の達成などをネタにします。学級の歌を創る、読書目標を全員で達成する、定期テストへの態度を確認するなど、クラス全体へ挑戦を促すネタです

〈ネタ⑫教師自身が感動した体験を語る〉

教師自身が自分の感動した体験をネタにします。授業の中だけでなく、生活の中や読書などから得られた感動。あるいは、子どもの頃に感動した体験でも構いません。感動体験のネタは、子どもの心も動かす力を持っています。教師自身が「感動屋」になって、積極的に感動を発信して行きたいですね。

〈ネタ⑬連続シリーズ化する〉

一回で書ききれないテーマでは、連続でシリーズ化するという手もあります。但し、シリーズ化は3号連続位までに止めて、連続する場合は発行の間隔を空けすぎないように注意しましょう。

〈ネタ⑭子供の活躍をみんなに紹介する〉

先生やごく一部の人しか知らなかった子供の活躍を全員で紹介することもできます。先生や仲間の温かい眼差しを互いに感じ合うことが期待できます。この他にもいろいろなネタを考えることができますね。

〈ネタ⑮クイズを紹介する〉

子供はクイズが大好きです。子供の好奇心や挑戦心、思考力や集中力を使うクイズを盛り込むこともできます。WONDERの中にも使えそうなクイズが入っていますね。授業中には時間が不足して盛り込めないような、難問を与えることも可能です。発展的な課題を出してもいいですね。

IV. さあ学級通信を書こう！

学級通信【WONDER】を読み解くことで、こんなに学級通信を書く「ネタ」「コツ」が見つかりました。この15のポイントの視点で【WONDER】を再度読んでみてください。15のポイント以上の「ネタ」「コツ」が発見できるでしょう。そうなれば、後はもうテーマを決めて書くだけです。そして、【WONDER】を更に深く読んでいくと学級経営のポイントや、教師にとって必要な【資質・能力】も感じ取っていただくことができる筈です。

また、この本自体にも学級通信のネタが沢山詰まっています。使えそうな情報を加工して活用してみましょ。そして、時々同僚や先輩の学級通信を読んでみることをお勧めします。そこから、学級経営のポイントや、指導の工夫、あるいは教材のネタになる情報を見つけることができるでしょう。また、そうした情報を見つけられる様になるということは、教師としての技量の伸びを意味します。

学級通信は教科横断的、児童横断的、成長縦貫的な性質を持っています。教科の枠だけではない情報を子供に伝える。子供が伸び行く情報を子供が共有する。そして、四月の学級開きからの一年間を通して、育ち続けてきた子供と教師の記録が年間縦貫的に蓄積されていく。子供たちとの出会いから、子供と共に学び合ったこの一年の成長のポート・フォリオにもなります。そして、それは教師にとっても自己の成長を確かめる年輪になって行くという価値もあります。子供を育てつつ、教師自身も自己の成長を実感する。教師という職業ならではの充実感を生むことにも通じて行く。学級通信はそうした【育て力】を持っています。ここに、学級通信を発行し続ける意味と価値があります。学級通信の発行を通して、響き合う「響室」を創り、自信と充実感を持った学びの場をつくって行きたいものです。

